

総論 「子」と「親」を支えるために何が必要か？

父親・シングルファザーから考える —子育て期の親への支援のあり方—

吉岡 亜希子

北海道文教大学 人間科学部 教授、父親ネットワーク北海道事務局長

聞き手：加賀美 太記（阪南大学 准教授・本誌編集長）



子育てにおける課題としての 親の孤立・孤独

【加賀美】2022年の出生数が80万人を割り込み、1899年の統計を取り始めて以降最小となる見込みです。岸田政権も重点政策に異次元の少子化対策を掲げ、あらためて少子化が深刻な社会問題として認知される状況です。少子化が進んだ要因は複数あると思いますが、まずは、吉岡先生が考える現在の子育ての課題についてご意見をお伺いできればと思います。

【吉岡】私が様々な活動をしている中で本当に感じているのは、日本では孤独で孤立した子育てが行われているということです。いろいろな場面で母親1人、父親1人、あるいは夫婦だけで子育てしなければならないと親自身も思っているし、社会全体でもそのように捉えています。そこが大きな課題だと思っています。

また、私自身の子育てを振り返ってもそうだったと思いますが、お金を稼ぐ仕事の方が子育てよりも価値が高い、そう親自身も社会全体も考えている。それが、親の子育てを苦しめているように思っています。さらに、子育てや教育が商品化というべきでしょうか、消費するもの、お金で買うものであるといった潮流が現れていると感じています。私自身の子育てでも、一生懸命

良い親をやるべきだという価値観の中で、お金を使ってテーマパークに行くといった、お金を使って子どもと遊ぶこと、これが良い親を頑張っている証になるようなニュアンスがありました。実際の子どもの姿をよく見れば、そういったところに行くよりも、家の近くにある裏山の自然の中で遊んでるほうがよほど楽しそうなのですが、親がこうしたことを学ぶ機会もないし、実感する機会もないまま、子育てがスタートしてしまっている。この状況も大きな問題だと思います。

もう一つ、私は今、こども発達学科に勤務しており、保育士や幼稚園・小学校の先生を育てています。その現場、つまり保育や子育て支援の拠点が、今はサービスの拠点になってしまっています。保育所にしても子育て支援の場にしても、先生たちは一生懸命やっていますし、親も一生懸命やっている。けれど、本来は親がしつけるべき生活の様々な部分を、「全部保育士さんやってよ」みたいな動きも、やっぱり少なからずあるんですね。親の仕事やリフレッシュも大事ですが、0歳や1歳から週5～6日、しかも長時間保育所に預けている、あるいは預けざるをえない実態があります。今後、本当に際限なくなってしまうかもしれませんが、サービスや商品として保育・子育て支援を位置付けてしまっているということの現れのようにも思います。

ただ、「そうではないんだよ」という考え方を持っている保育所、あるいは子育て支援の場では、子育ての商品化のような状況は進んでいません。子どもを真ん中に、親と一緒に子育てをしていこうとすると、保育所にしても子育て支援の場にしても、商品化を求めるような保護者はいなくなりますね。たとえば、「おもちゃが壊れていた。危ないじゃないか、どうしてくれるんだ」と怒る親もいますが、常日頃から子どものことを一緒に考えようというスタンスのところでは、親はむしろ「壊れてるから、一緒に直しましょう」「私たちが直しますよ」と言ってくれるそうです。親の側も、保育者の側も、お互い勉強して、学んで一緒にやっっていこうという価値観を共有していく必要があると思います。

【加賀美】 子育ての範囲を少し広く取って、思春期、あるいは青少年期にかけてはいかがでしょうか。

【吉岡】 思春期から青年期の課題ですが、近年、不登校の子どもが増えています。昨年秋には不登校の子どもが24万人、前年から5万人近く増えているという数字も出ています。こうしたことから、現状の学校教育の限界みたいなものを感じます。

ただ、私は親の学びを研究のテーマにしている関係もあって、不登校のような子どもの苦しみの一定程度は親が原因だという実感があります。たとえば、子育てにかかわる活動に参加する中で見えてくるのですが、子どもの学力・学歴に非常に期待して、子どもに過度なプレッシャーを掛けるお父さんが一定数いるんですよね。これは本当に深刻だと思います。以前、親向けの学習交流会を開催したとき、小中学校で父親のプレッシャーが原因で不登校になっていた

子ども、今は大学生になっているんですけど、その子が来てくれて話をしてくれました。何でも、小学校からお父さんに休みの日は12時間勉強しろと。すごいですよね、小学生ですよ？

その子のお父さんの職業は法曹関係だったそうで、「自分は大変な司法試験を乗り越えてきたんだ。だから息子にも同じようになって欲しい」と、すごくプレッシャーを掛けていたそうです。その子は、小学生の頃から父親の期待に応えられない自分は生きている資格がない、死んでしまいたいと思っていたと言っていました。小学生でも大変な苦しみを抱えていたんだと、とても印象に残っています。

ただ、想像ですけれど、そのお父さんは自分の子育てしか知らなかったのではないかと思います。自分以外の子育てを間近で見て、よその家庭とお付き合いがあって、たくさんの別々の子育てを知る機会がなかったのではないのでしょうか。つまり、子育てが1つの家庭で完結してしまっていて、そこで全部をこなさなければいけない。それが当然で、当たり前だと思込まされていること、そこが乳幼児期も含めて一番問題だと思います。

【加賀美】 うちのうち、よそはよそといった言葉もありますが、逆に別の家庭の子育てを知る中で、自分たちの子育てを振り返ることができるわけですね。そう考えると、確かに親の孤独の解消はとても重要な課題ですね。

【吉岡】 そうなんですよ。自分の子育てって、やっぱり他の事例を見ないと見えてこないんです。他者がいないと自分を理解することはできないわけですが、子育てでもまったくその通りです。そのためにも、親

同士のいろいろなつながりが必要だと思えます。

たとえば、父親ネットワーク北海道と一緒に活動してくれているお父さんたちは、おやじの会やPTA活動に取り組んできた方たちですが、お話を聞くとそこで親同士のつながりを持ったことによって、自分がすごく変わったんだとおっしゃいます。そもそも、親は保育所や小中学校で先生たちがいかに一生懸命やっているか十分に知らないんですね。けれど、PTA活動に参加することで、わが子はこんなに先生たちに良くしてもらっているのか、あるいは他のPTA活動をされている方たちにこんなにお世話になっているのか、ということを知り始めて知ります。すると、自分も協力したいというふうに発想が変わっていくんですよ。そうすると、自分の子育てを振り返ったりして、自分の子どもを見る視点も全然変わってきます。先生たちから自分の知らない、子どもの別の姿とかを教えてもらって、そんないいところが自分の子どもにあるんだとかね。そうしたことに気づくと、自分の子ども以外の子どものかわいく見えてきて、この子たちに関わりたいと言って、自分の子どもたちが大きくなった後も何かしら活動にかかわったりするんです。父親ネットで活動しているお父さんたちも、自分の子どもが卒園・卒業した後も、活動に継続的に取り組む方が多いです。

父親にとっての 子育てにおける困難

【加賀美】 少し事例を挙げていただきましたが、男性である父親の子育てについて、母親の場合とは異なる難しさや課題があるように思いますが、その点はいかがでしょう

うか。

【吉岡】 先ほどもお伝えしましたが、やっぱりお父さんの一部は子どもの学力とか学歴に対する期待が大きいんだと思います。私の身近なところでも、大学教員のお父さんが子どもに高い学力を求めて、成績の話ばかりしていたら、すっかり子どもに口を聞いてもらえなくなってしまった事例もあつたりします。

また父親に特徴的だと思った事例をご紹介しますと、つい先日お父さんたちが自分たちの子育ての仕方を交流する学習会を開催していたんですが、そこでご自身の学歴や来歴だけを延々と語られた方がいたんですね。これは父親ならではの、という感じの発言でした。お母さんたちの交流会も開催していますが、そちらでこういった類の発言を聞いたことはありません。そういう話を延々する背景には、やっぱり男性独自の苦しみがあるんだろうなと思います。

あとは、普通のお父さんたちの横のつながりって極端に乏しいんですね。だから他の父親のことや他の家庭の子育てを知る機会がない。そこで、自分の思うとおりに子どもが勉強しなかったりすると、暴力をふるってしまったり、直接の暴力でなかったとしても、子どもに対して威圧的な行動をとったりすることがあります。これらの背景には、つながりの不足もありますし、先程のような男性に特有の社会からのプレッシャーがあります。親自身が幼いころから「男なんだから勉強しろ」「弱音を吐くな」といったものがあって、その延長線上で父親としてこうあるべきみたいなものに縛られるようになってきていると思います。

【加賀美】 そういう意味では、父親という点に絞っても、子育てにおける横のつなが

りは重要になりそうですね。

【吉岡】 そうですね。おやじの会という父親たちの集まりが全国にあります。こうしたつながりはとても大事だと思います。おやじの会も最初から課題意識を持っていた人だけでなく、妻に言われて渋々入ったという人も少なくはありません。ただ、渋々だけど行ったら楽しかったと感じる人も多いんですね。おやじの会を見ると、楽しくなる工夫をするのが上手だなと思います。幼稚園等でおやじの会の活動をされているお父さんたちは、どうやったら自分たちも楽しく、しかも子どもたちを喜ばせることができるかという発想をお持ちです。そして、それぞれが仕事で獲得した知恵や技術や工夫を持ち寄って、それを実行しようとします。北海道だとおやじの会が幼稚園や小学校に子ども向けのスケートリンクや雪山の滑り台を作ったりしていますが、そのために重機等まで出してくれる父親がいるんですね。そういう分野でお仕事してる人が「よっしゃ、そこは自分の出番だ」みたいな感じで。もちろん子育てについての活動ではありますが、そこにプラスされた楽しさが、おやじの会にはあって、それがお父さんたちにはいいのだろうとも思っています。

【加賀美】 子育てのためだけじゃなく、本人たちの楽しみにもなっているのは少し意外ですが、大事なことだと感じます。

【吉岡】 私もそう思います。幼稚園でおやじの会をやってるお父さんたちは、子どものためにイベントをしたりします。たとえば、ある幼稚園ではお祭りのイベントで、お父さんたちが出し物をするそうです。そのとき、あるお父さんは芋虫の役をやるこ

とになったのだけれど、「父親が芋虫の役だと子どもは嫌がるかな」と思ったりしたんだそうです。ところが、小さい子どもは役などそれほど気にしないので、むしろお父さんが出てくれるっていうことだけでうれしくて、次の日には、自分のお父さんが芋虫をやったんだってクラスで自慢していたそうです。そんなことを聞いて、お父さんはもうしびれるほどうれしかったと。あるいはイベントのとき、バルーンアートを何人かのお父さんたちが一生懸命練習して実演すると、何十人もの子どもたちがすごい視線で真剣に見てくれます。その姿を見て、またお父さんたち、しびれるわけですよ。こんなに注目してくれるんだと。うれしくてうれしくてしょうがなくて、次のことをまたすぐ考えたり、あるいは自分の子どもが卒園したら取りあえず活動も終わりなんですけども、あまりにも活動が楽しくて終わりたくないって言って、OB会を作るんですよ。それで、園のイベントのときには、昔遊びのコーナーなどを作って、卒園以降も園の活動にちょっとですが関わったりする。子どもと触れ合う楽しさを知った人は、一生涯、そういうふうに参加しています。

あとね、小さいときに子どもたちと仲良くなって、自分の子ども以外の子どもの名前を覚えたり、逆にその子どもが何々くん、何々ちゃんのパパだと覚えてくれたりすると、同じ地域に住んでるので、卒園したり小学校を出たあとも、自分のことを覚えてくれたりするんですね。そして、高校生や大学生になってからも幼稚園のイベントに来てくれて、声を掛けてくれたりとか、地域のバーベキューのようなイベントで、園で知り合った子がちょっと顔出して「おじさんおじさん」って親しく声掛けてくれたりする。それが本当にうれしいとお父さん

私たちは言ってます。豊かですよ、そういう人生って。

【加賀美】 そうですね。つながりがものすごく広がってる感じがします。

【吉岡】 ただ、注意が必要なのは、ちょっと気が緩むと、単なる飲み会仲間の雰囲気になっちゃうんですよ。あくまでも子どもを中心に力を合わせる、あるいは親としてみんなで子育てをよいものにしていこうという意識を持った人、キーマンが子育てにかかわる会としては必要なんですね。

もっとも、そうした仲間とのつながりは、一人の人生にとって大事なことだとも思います。まったく業種の違う大人同士が出会って、仲良くなる。子どもが大きくなったあとも飲み会仲間であれ、そういうつながりは人生豊かにしてくれると思います。子育てを通じてつながりが広がっていますから、定年になって、地域に誰も知り合いがいなくて1人ぼっちになって、かつ妻から疎まれるようなお父さんにならなくて済みそうですね。

【加賀美】 確かに、地域でちゃんと受け入れられて活動できる場を見つけてられているわけですからね。

【吉岡】 そうなんですよ。だからもう本当に彼らは幸せですよ。

シングルファザーにおける子育ての困難

【加賀美】 先生は『シングルファザーハンドブック』を当事者の父親たちと作成されておられます。ひとり親というと私たちは

つい母子家庭を想像してしまいましたが、父子家庭も同じような大変さ、あるいはまた別のしんどさを抱えており、父子家庭から見るとこそ気づける子育ての課題もあるように思います。こうした父子家庭の実態について、お話しいただけますでしょうか。

【吉岡】 シングルファザーハンドブックは、webでも公開していますので、どなたでもご覧いただけます。このハンドブックは、実際にお父さんたちがお互いのお大変だった、困った経験等を共有しながら作ったのですが、どんなことが語られたのかについて順番にご紹介します。

まず仕事編です。仕事のことは、皆さん本当に大変そうでした。とにかく仕事が続けられない。小さい子どもがいたら、仕事を辞めざるを得なかったとハンドブックと一緒に作った3人のうち2人は言っていました。2人ともかなり専門性の高い職業でしたが、子どもが小さいうちは早朝に出勤す



ることは難しいですし、17～18時から会議が始まるよとなったらもう保育所にお迎えにも行けないので、仕事は辞めるしかなかったそうです。男性であれば長時間労働が当たり前だとされてしまうと、とてもじゃないけれど子育てはできませんよ。また、もう1人の方は、なんとか仕事は継続したけれど、やっぱり非常に厳しかったそうです。社内でも冷たくされるし、チームの責任者になっても早めに帰らなければならないときがある。すると「責任者なのに帰るんだ」と部下から言われたりとかね。退職した2人は収入が激減したので、インターネットでちょっとした物販をするなど、何とか収入を得ようと頑張ったそうですが、収入の面も本当に大変だったそうです。他のシングルファザーの方からの相談にも、皆さん、めったなことでは仕事を辞めてはいけないと話しておられましたね。

それに、そもそも一人親になったことを職場に言うべきか言わざるべきかですごく悩んだとも言っていました。それを言ったら不利になるかもしれない、あるいはそもそも言いたくないということもあったりして、とても悩んだそうです。その延長上にあるかもしれませんが、仕事が大変なときに、どこまで人に甘えていいのか分からなかったとおっしゃっていました。保育所ではママ友もできるそうで、大変なときは子どもを預かってあげるよと言ってくれるけれど、だからといって毎日毎日夜2時間3時間預けるわけにもいかないし、迷惑だろうと気が引ける。どこまで頼っていいのかわからなかったそうです。

次は家事についてです。家事はまあほこりが少々積もっても死なないから、掃除は適当だと皆さん共通して言いましたが、問題は食事です。食事はやっぱりちゃんと取らなきゃと思うんだけど、スキル

が十分なくて大変だったそうです。あるシングルファザーの方は、毎日、コンビニ弁当かスーパーの総菜を買ってきて、親分で分けて食べていたそうです。ご飯も家ではあまり炊かなかったり、そもそもご飯は朝炊くのか、夜炊くのかも分からなかったということもお話しされていました。そうした状態ですから、幼稚園のお弁当作りのハードルが高くて、最初はたいへん苦労したそうです。何とかだんだん慣れて、できるようにはなったけれども、食事関係はすごく大変だったということですね。

家事編では子どもの洋服のサイズ等、子どもに関わる用語、子育て用語、それが本当に分からなかったとも言っています。園で工作とか絵の具を使うときに汚れないように着るスモックという上着がありますが、そのスモックという言葉が分からなかった。園からのお便りに「スモックを持たせてください」と書かれていても、何のことだろうと戸惑ったそうです。子どもの服のサイズも、80とか100とかありますけども、そうしたサイズすら分からなかった。結局、こうした子育て用語を毎回一から調べることになったという話もしましたね。

3つ目の子どもの育ち編では、シングルファザーといっても、身近に自分の親がいる家と、そういう頼れる身内がない子育ては全部違うんだ、ということをおっしゃっていました。3人とも身近におじいちゃん・おばあちゃんがないなかで子育てをされていたので、それはすごく大変だとおっしゃっていました。その他にも、参観日に自分が行っていいのかどうなのかについて、皆さん気にされましたね。お母さんたちが中心の参観日に父親である自分が行くと、目立ってしまって子どもに悪いんじゃないかなってという遠慮から、授業参観

には行かなかったこともあったそうです。それ以外にも、ランドセルを買う時期が分からなかったり、女の子の場合は温泉や銭湯に子どもと一緒に入るのも難しいので、そういうところはなかなかいけなかったという話もされてましたね。

あと、お父さんはお母さんたちのように井戸端会議や茶話会とか、そういうのがなかなかできないので、人とのつながり作り、ネットワーク作りが下手で、本当に孤立してしまうということをおっしゃってました。でも、それだと子育ての情報が入ってこないし、保育所や幼稚園、小学校に入ってもいろいろ困る。そこで皆さん、PTA活動とか保護者の集まりにはできるだけ出るように努力していたそうです。実際、同じシングルでもシングルマザーは横のつながりを作るのがすごい上手で、シングルマザーのお母さんたちがお下りのやり取りをしているのを遠くで見て、うらやましいなと思ったけれど、なかなかそこには入っていけなかったそうです。あと、女の子のお父さんはやっぱり思春期の女の子にどう対応していくのかがハードルとして高かったともおっしゃってましたね。生理の問題や下着の問題も、男だからどうしていいのかわからなかったのも、それは学校の保健室の先生を頼りましたといった経験を共有していました。

最後の4つ目は相談編です。お三方とも本当に子育ては大変だし、家事も大変だし、仕事も辞めて、収入も減って生活も苦しくなってきたので、行政の窓口に行くんだけど、シングルマザー世帯ほどは収入が低くないので、あなたは公的な支援を受ける対象には該当しませんと、窓口から帰されてしまう経験をされたそうです。そこが辛かったという話をされてました。一定程度の所得があるので、民間のベビー

シッターを頼む、あるいは家事を手伝ってもらう民間業者を頼ったらどうですかともアドバイスされたそうですが、こうしたサービスはそれなりに高額です。結局のところ、自分でやるしかなかったということをお話しされてましたね。そうしたこともあるので、ハンドブックには、1人で孤立しないで、なんとか人の助けを求められるように、PTA活動に顔を出す、または地域のお父さんたちのつながる団体にアクセスしていく必要性も載せています。

いま、本当に必要とされる 子育て支援とは

【加賀美】 シングルファザーの置かれた状況がよくわかりました。また、シングルファザーに限った問題でもない部分が含まれているようにも感じましたが、すべての子育て世帯に対して支援を強めるということを考えてときに、まず解決すべきところはどの辺りにあるとお考えですか。

【吉岡】 私は今、いろんな支援制度はある種充実していると思ってもいます。でも、実際の子育てがすごく楽しくできるかというと、そうでもないですね。私は社会教育が専門分野なので、必要なのは制度の充実だけではないのだろうと思います。先ほどからずっと言ってるように、シングルファザーだったらその苦労や苦しさも含めて、子育てについて分かち合えるような、話す場のような、仲間がいるような場を作るといったことの方が大事だと思います。

「シングルファザーハンドブック」を作ったときにも、東北でシングルファザーの支援をしている団体を立ち上げたお父さんのインタビューをしましたが、そのお父さ

人も子育ては一人だけでは十分じゃなくて、人の手を借りることができる力を付けなきゃ駄目だよねという話をしてくれました。私も同感で、ずっとその気持ちで活動してきました。人の力を借りるとするのは、親としての非常に大きな力です。助けてくれと言ったり、大変だからちょっとここはお願いと言い合える人間関係を作ることが、親として大事なんですが、そこが十分じゃない。結局、行政がカバーしようと、いろいろな子育て支援をやっていて、それも大事だし必要なんですが、それだけじゃ足りないんですね。もっと身近なところで、ほんの少しでいいですよ。1家族か2家族、遠慮なく子どもを預け合ったりできるような関係があったら、非常に子育ては楽になるんです。そういった人の手を借りることができる力を付けるための支援があればいいなと思います。

あるいは、子育ては常にキラキラしてて楽しいものだ、そうでなければいけないんだっていう風潮もありますが、実際はそんなわけではありません。そうしたことも、人と交流を重ねて、子育て仲間ができるとわかってきます。子育てで手を抜いてもいいし、楽しくないときもあるんだってことがわかってくる。それに人と関わる経験をすると、たいてい面倒くさいじゃないですか。仕方ないことでもめたりとかね。でも、それでもいいですよ。面倒くさかったり、もめてもいいなっていうのを経験することで、いつも子どもとハッピーでいなければいけないわけではないし、子どもと性格が合わなかったりしたときも、それでもいいんだと思ったりできる。そういう力を親同士の間には付けてくれる場です。

私も子どもが小さいとき、さっぽろ子育てネットワークに関わるようになって運営委員をやりました。当時、私もわりとお金

を稼ぐのが大事という価値観が強いところあり、普通に男性に負けないよう、会社で働いていました。だから、さっぽろ子育てネットワークの運営会議に行って仰天したんですが、学習会を開くときに参加費を500円にするか300円にするかで30分どころか1時間も話すんですよ。びっくりして、その差額全部私が払うから早く終わろうよって言ってしまいたい気持ちに最初になったんですよ。でも、何年か活動する中で、それは違う、こういうことが大事なんだと思い直しました。話し合ったりしながら、お互いの考えを認め合う。いろんな意見や多様な人がいていいんだということの訓練になりましたよ。そういう訓練を積み重ねていくと、少々突飛なことを言うお父さんお母さんとでも全然大丈夫ですね。こういう人もいるし、そういう人のいいところも見えるようになったし、子どもに対しての見方も広がりましたね。うちの子はそんなに、優秀だったり、言うこと聞くわけでもないけど、それも良しとしようみたいな。人間に対する幅が広がりました。こうした経験やつながりを得られる場が、やはり今必要なのではないかと考えています。

【加賀美】 先ほども、祖父母のような身内に手助けしてもらえるシングルファザーと、1人で育てている家庭の大変さは全然違うという話がありましたが、血縁が昔に比べて数が少なくなっているうえに、一般的には地縁的な要素も弱くなっている状況においては、子育てを支援する制度を作るだけじゃなくて、むしろ親のつながりを促進する支援が重要だとも言えそうですね。

【吉岡】 そう思います。制度をどれだけ整えたとしても、補いきれないものはあるでしょう。ですから、現代版の新しいつなが

りづくり、これを社会全体で応援していくような方向に切り替えていった方が、私は日本の子育てが豊かになっていくと思いますね。

【加賀美】 そうしたつながりづくりという点では、生協をはじめとするいわゆる協同組合は重要な、あるいは自分たちの存在意義と関わってくると思いますが、先生からみた生協への期待や可能性はいかがでしょうか。

【吉岡】 私の勤務先である北海道文教大学は、札幌のすぐ近く、恵庭市というところにあります。恵庭ではワーカーズコープさんがすごく頑張っていて、そのメンバーの女性陣と私も密に連携を取って、恵庭の子育てが豊かになるようにということで色々な活動に取り組んでいます。恵庭のワーカーズコープの代表は、もともと子育て中のお母さんたちが集まって、自分たちでよりよい子育て環境を作ろうという取り組みをしていた方なんですけど、その方が今、ワーカーズコープでリーダーシップを発揮されているんですよね。そうしたこともあって、これからの子育てを、未来を作っていくということに関して、そのワーカーズコープの取り組みにはすごく期待できると考えています。また、ワーカーズで親として育てている保護者もたくさんいらっしゃいます。そのワーカーズコープのお母さんたちと、私の教えている学生とをつなげているんですけど、本当に何か新しいものが生まれてきつつあるという感じがしています。協同組合には、これからの時代を作っていく希望の光みたいなものを感じますよ。

それに私は韓国の農村教育共同体の調査をずっと行っています。そこは完全に、子

育てのこともそうですけど、地域の図書館など、いろんなことを協同組合方式で作っているんですよね。若者が地域に根差すための組織も、全部協同組合方式でどんどん作っていているのを見えています。そういう意味では、例え小さい町でもこの方式だといろんな組織を生み出せるんだと実感しているのでも、北海道だと小さい町も多いですが、そうしたところでも、こういうやり方を理解して、いろんな形で展開していくことができるのではないかと思います。